

## 日光産カラフトモメンヅルについて

土 屋 守

M. Tsuchiya: On *Astragalus schelichovii* Turcz. from Nikko, Tochigi Prefecture

### はじめに

邦産ゲンゲ属の植物は大井次三郎(1972)などによると現在9種知られているが、その中にカラフトモメンヅル *Astragalus schelichovii* Turcz. は含まれていない。筆者の知る限りでは杉本順一(1978)に日光に産することが記されているのみである。

村田源(1984)は本種について報告しているが、それによると、現在日本のフロラのメンバーとして取り扱われていないが、日光及び北海道天塩国、網走国に産するという。また、国外の産地としてはカムチャッカ、サハリン、オホーツク海岸地方、朝鮮北部に分布するという。村田のあげた日光中禅寺湖産のもの(1979年採集)については採集者の古瀬氏の言として「昔は数百株以上あった」ということであるが、現在はキャンプ場になっていてほとんど絶滅したのではないかとと思われるとも記している。筆者は1986年8月、日光へ行った際、偶然にも本種を見つけたので日光に今なお健在していることを報告する。

### 生育概況

筆者の見た限りでは健在とは言っても個体数は少ない。15㎡位の所に全部で25株程であり、花や果実をつけた株は5株であとは若い株ばかりであった。

このことからわずかに残った数株からようやく少しずつ殖えてきたといった印象を受けた。向陽地を好むようであり現在はまわりに他の植物が少ないが、大型草本の進出などによっては生育状態に大きな変化があるかも知れない。本種の生育地は地形上自然的要因によって容易に絶滅してしまう可能性がある。

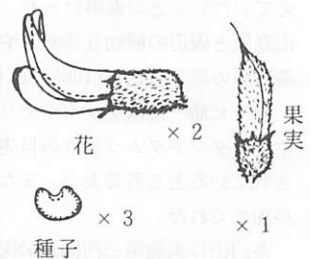
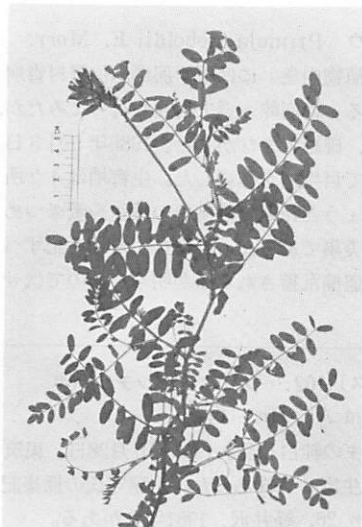
個体数が非常に少ないので本種の保護の観点から詳しい生育地点や生育環境については省略する。

### 形態について

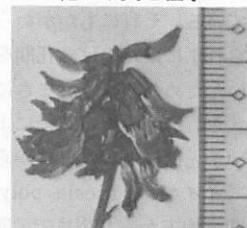
カラフトモメンヅルの形態についてはあまり知られていないので、筆者の採集品に基いて記しておきたい。

砂地または砂礫地に生える多年草。根は木質で太く長い。地表近くから多数の茎を出し、各茎は放射状に拡がり、基部は這って斜上し長さ30~45cm。茎および葉柄は中央でつく白い伏毛をやや密生する。

葉は奇数羽状複葉、長さ(7)8~11(12)cm。小葉は15~21枚で長だ円形~狭長だ円形、全縁、長さ10~21mm、幅5~9mm、薄質。先端は円~微凹頭で小突起がある。下面に白毛を生ずるが上面は無毛。小葉柄は長さ0.5~1mm。托葉は皮針形~長三角形で背面は約半ばまで合生し、裂片は鋭尖頭、長さ4~8mm、有毛。葉腋より6~9cm程の総梗を出し20mm



花と果実と種子



カラフトモメンヅルの標本、全形と花序

ほどの総状花序に10数花を密に着け花はやや垂下する。花は淡黄緑色で長さ10~13mm, 小梗は1~1.5mm。旗弁は開き微凹頭。子房は有毛。苞は皮針形で膜質, 長さ3~5mm。がくは筒状, 長さ約6mm, 5裂し黒褐色毛をやや密生する。がく齒は長三角状, 鋭尖頭, 長さ約1mm。

総梗は果時には伸長し, 果実を含めて長さ16cmに及ぶ。莢果は直立~やや斜開し円柱状, 先端は柱頭が残留し針状に尖る。長さは15~18(19)mm, 幅4~5mm, 黒褐色毛をやや密生する。2室に分かれ多数の種子を持つ。種子は腎形で暗褐色。扁平, 平滑,

長さ2mm。花期は7~8月。

邦産の類似種としてシロウマオウギがあるが, それとの区別点は村田源(1984)を参照されたい。なお, 標本は信州大学に納める予定である。

#### 引用文献

- 大井次三郎 1972 改訂新版 日本植物誌 顕花篇  
811 - 814 至文堂  
杉本順一 1978 改訂増補 日本草本植物総検索誌  
1 双子葉編 266 - 268 井上書店  
村田 源 1984 植物分類雑記15 植物分類, 地理  
Vol. 35: 34 - 36

〔植物ニュース〕103.ミズイロアオイ(新称) *Anoda cristata* (L.) Schlecht.

アオイ科の帰化植物。東筑摩郡明科町大足。1986年9月15日。近くの養鶏場の飼料へ混入して来たものであろう。花弁は淡青色。この属は副萼は退化。分果は10内外で星状に開く。先の方が鋭尖し開く。北米の南部, 中米及び南米の北部原産。和名は花色による。

(横内文人)

104.シチゴサンアオイ(新称) *Althaea armeniaca* Tenore

アオイ科の帰化植物。松本市松本城。1985年6月30日。葉は下から七, 五, 三に深裂する。この属は副萼5片は基部が合生。中央アジア, 西アジア(ソ連領)原産。和名は葉の形態による。

ミズイロアオイとシチゴサンアオイは, 共に静岡県県の杉本順一先生に御同定いただき, 新和名をつけていただきました。記して感謝致します。なお二品とも日本初の採集品とのお便りでした。両者とも信大標本庫へ納めた。

(横内文人)

105.ミドリヨシノ *Prunus yedoensis* Matsum. var. *nikaii* Honda

ソメイヨシノの若葉, 花柄, 萼が緑色になったものである。山口県萩市(久保田一野生のサクラ, 杉本一日本樹木総検索誌)に知られているが, 南安曇郡豊科町光城山にも高さ10m位の1本が栽植されている。1986年4月29日。花期はソメイヨシノより約1週間おそい。

(横内文人)

106. ハリエンジュ(ニセアカシヤ) *Robinia pseudoacacia* L.

1987年2月11日, 薪炭材とするためにハリエンジュを切っている人に出会った。大木になると刺がないと言う。なるほど小枝にも全く刺がない。かつて松本で採集したトゲナシハリエンジュも高木であった。若木で刺のないハリエンジュもあるのだろうか。

(横内文人)

107. ウスギオウレン *Coptis lutescens* Tamura

本種は1978年発表の比較的新しく分った種類である。原論文にはその産地に, 東京都, 神奈川・長野両県(国師岳・麦草峠・東部町)が挙げられているが, その後出版された「日本の野生植物Ⅱ」(平凡社)には東京・神奈川・山梨・静岡各都県となっている。

私は, 数年前, 南木曽町柿其産の3回3出複葉のコセリバ型のオウレンがウスギオウレンであることを知った。昨春, 諏訪の今井さんたちとオーレン小屋経由で八ヶ岳を調べたが, 小屋の名となったオーレンはコセリバ型とセリバ型の2様があるが, うす黄色の花が咲きがく片は細長くとがっていていずれもウスギオウレンであることが分った。念のため命名者の田村博士にもみて頂いたが, 返事は Yes であった。私は, コセリバオウレンの花をみたことがなく, 白色の花をつけたコセリバオウレンの写真もみていない。従来, コセリバオウレンとされていたものはウスギオウレンではなかろうか。(清水建美)

108. ナガバノスミレサイシン *Viola bissetii* Maxim.

関東, 東海, 南畿等の本州と四国の暖~温帯林内に生ずる植物で, 長野県では木曽郡南部と下伊那郡南部の分布が知られている。下伊那のそれは「長野県植物総目録16」(1964)には下条村, 阿南町和合, 根羽村, 天龍村神原区の龍西地区と龍東の天龍村平岡が記されているが, 「下伊那の植物中巻」(1973)には龍西地区のみで, 天龍村平岡は記されておらず, その存在が不確実であった。1986年7月28日, 天龍村中井侍(旧平岡村)の観音沢の標高410mのウラジロガシアラクシ林内に生じていた。これによって平岡の生育地も確認された。この林内には下伊那では珍らしいユズリハの大径木があり, 果実をつけていた。

(浅野一男)